被爆７０年原水爆禁止広島大会フィールドワーク報告

継承、それは川の流れのように

中船津 徹郎

広島に８月がまためぐって来た。連日の猛暑。前日の開会総会会場グリーンアリーナへと歩いた折り鶴平和行進も、夕方近くの出発にもかかわらず暑かった。続くこの日８月５日は各地で行われる分科会やフィールドワーク。その中に「バスツアー・安野発電所への中国人強制連行・中国人被爆の歴史を歩く」が位置づけられ、広島に集った各地からの参加者とともに現地安野を巡る取り組みが行われた。

平和公園を出発

平和公園噴水前のバスに集まったのは20名。午前８時、安野に向けて出発したバスの中で岡原さん、川原さんらスタッフの挨拶に続き、RCC制作の「和解」のDVDが車内上映される。今日一日の現地回りを前に、まずはしっかり予習タイム。中国道を走り、加計に近づきつつある中、参加者の自己紹介。東京・神奈川・大阪・京都・静岡・石川、そして広島。多くは各地の労組から参加されている模様。

坪野にて

善福寺でトイレ休憩の後、坪野の発電所へと向かう。中国人受難の碑へ上る坂道にも碑の周辺にも、最近草刈りがされている形跡。聞けば善福寺の藤井住職や中国電力の職員の方が暑い中作業してくださったとのこと。一つの行事をこうして支えてくださっている方々のお気持ちに感謝しかない。碑の前で説明の後、思い思いに写真撮影。石碑に刻まれた受難者一人ひとりの名前に、それぞれの顔や姿、それぞれの苦しみや心情、そしてそれぞれの人生を「想像力」をもって思い重ねてほしい。

石碑の前で記念撮影する参加者

暑い日差しを避けて日陰の階段に座っていただき、説明の続き。その後、長い階段を途中から合流してくれた中国電力の職員の方の先導で登る。登り切った貯水槽。夏の太陽がカッと照りつけ、登ってきた体から汗が噴き出す。中電の方から工事やダム構造の説明を受ける。参加者の人たちは、貯水槽から見下ろす風景と、工事当時の坪野を鳥瞰した写真と見比べている。

貯水槽から工事現場跡を望む

故郷から、愛する家族たちから無理矢理引き離され、気がつけば異国の偏狭な山逢いの地。今日のような灼熱の夏、雪深く寒風吹きすさぶ冬。ここでも「想像力」を働かせて、そんな人々の姿や思いを見下ろす風景の中に描いていることだろう。

善福寺にて

善福寺に戻り、藤井慧心住職が、遺骨を預かっていた当時のこと、受難の碑の碑文を書かれた思いなどを、時にユーモアを交えながら話された。「平和は人から与

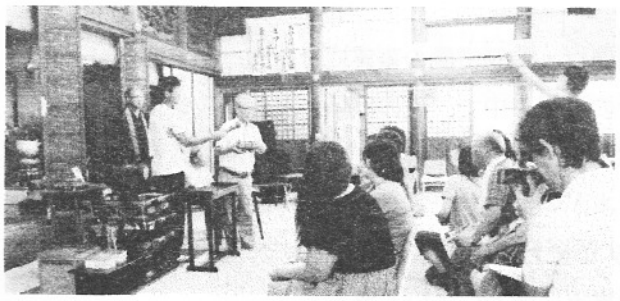
善福寺の藤井慧心住職

えられるものでなく、自分が考え行うもの。自分も住職という立場で頑張りたい。ここで学んだ話を、いろんな人に広げていってほしい。」

川原さんから「遺骨送還」の話があった後、地元の谷キヨコさんからのお話。当時、中国人たちに、戦死した弟の面影が重なって見えたという。谷さんのお母さんの目にもそう映ったのだろう。仕事に向かう彼らにおむすびや水を分け与えたエピソード。

谷キヨコさん（左）のお話を聞く

栗栖薫さんからは中国人たちの作業の様子。裁判でトロッコ事故の立証のために当時の写真をもとにその寸法を割り出して作ったというトロッコの模型やご自身で描かれた隧道の絵などをもとに語られる。



栗栖薫さんがトロッコの説明をする

岡原さんからは和解の過程やその意義について。語りつつも 16 年の長きにわたる裁判の中で、和解の日を見ることなく亡くなっていった多くの原告たちの顔や姿を思い出されたのだろう、思わずこみ上げてくる涙…。

津浪にて

昼食後、またバスに乗り込む。太田川を遡行するように、土手沿いの国道を津浪へと北上。収容所のそばに住んでいた岡田ヒデコさんの証言の内容が話される。家の傍にあるかまどで作られていた捕虜たちの食事のまずしさ、雪深く寒い冬を過ごしたセメント袋を縄で巻きつけた姿。この地であった事実をありのままに語り、陳述書提出に協力して下さった。善福寺での谷キヨコさんと同様、地域からのそしりや圧力に屈しなかった姿に、人としての優しさが、そして決して激しくはないが、静かで凛とした人としての強さが伝わる。

香草にて

香草神社石段下の杉林。この地にあった収容所の様子を栗栖薫さんが語る。栗栖さんの父はこの収容所の監視員として勤めており、当時 15 歳の栗栖さんも父に連れられ収容所や現場での中国人たちの様子をその目で見てこられた。中国人 100 人が 50 人ずつ 2 交代で休みなく続けられる隧道掘り。ガタガタの岩の上を、冬は雪の上を裸足で作業する姿、真っ暗で水びたしの隧道、宋継堯さんのトロッコ事故による失明。過酷で危険な労働実態。8 月 15 日、解放の日を迎えた中国人たちの悦び。帰国する 11 月 24 日までの加計住民への反発や農家や地元商店への略奪行為。しかし、そこも聞く立場の者の「想像力」である。自分たちを故郷や平凡な日常から強引に連れ去り、過酷な毎日を強い、虐げてきた日本と日本人に対する恨みがどれだけのものかが窺えるではないか。

山並の向こうから遠雷が鳴り響く。なんだか心配にもなるが、むしろ暑すぎず、熱中症の心配はなさそうだ。それでもいつも 5 月や 10 月の過ごしやすい時期に来るばかりだったので、結構大変な 8 月の現地巡り。車中で熱中症防止のための飴が回ってくる。

土居にて

参加者を乗せたバスは、途中脱走した中国人たちを連行した加計警察署（現在は山県警察署）のそばを通り、フィールドワーク最後の地土居へと向かう。

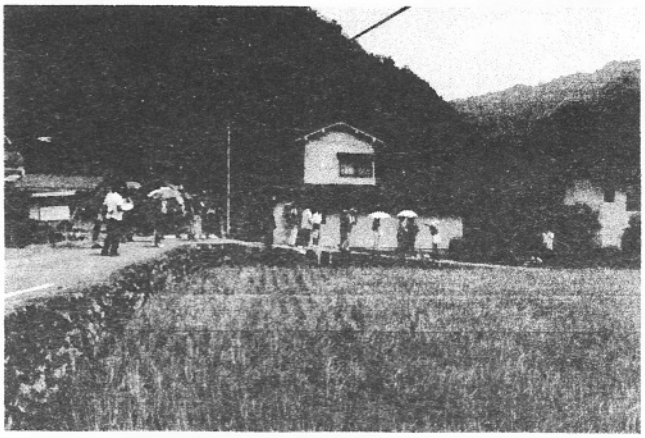
おそらくここではないかと思われる土居の収容所跡に立ち寄った後、橋を渡り対岸へ。取水口で再び中電の職員の方が 2 名待ってくれており、取水口の機能、構造や工事の様子が説明される。

今年 90 歳になる数少ない存命者の邵義誠さんの経験を中心に、当時の様子が語られる。一日中水の中に浸かった作業。少しでも遅れたり休んだりするとすぐに殴打される蛮行。収容所で休もうとしても足が上がらず、自分で足を持ちあげなくてはならないほどだったという。日々中国人たちを苦しめた水、砂、岩、泥…そして日本と日本人。便所の板塀の下に抜け穴を掘り、夜間 17 名が逃亡するという事件をはじめ、西松組の報告書記載だけで 4 件、実際はそれ以上の逃亡事件があったという。右も左も分からない異郷の地で、成功する見込みがあるとは思えない逃亡へと追い立てた状況のすさまじさに思いを馳せる。

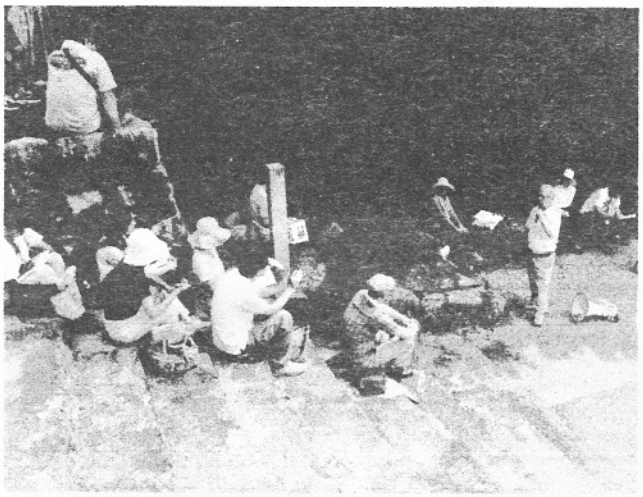
川の流れに

西に傾いた夏の太陽が川面に光を落とす。中国人たちの強制労働を見てきた目の前の滝山川の水は、この先で太田川本流に合流する。そして長い旅を続け、被爆地広島のデルタを潤していく。数多の被爆者が水を求めて水死していった当時 7 つの川へと。まるで安野の強制連行のその延長線上に広島の被爆があるように水は流れる。今年 70 年の節目を迎え、広島は「しかし被爆者には 80 年はない。被爆体験をどう語り継ぐのか。」と、その継承が焦眉の課題にされている。強制連行も沖縄も南京もまた同様である。

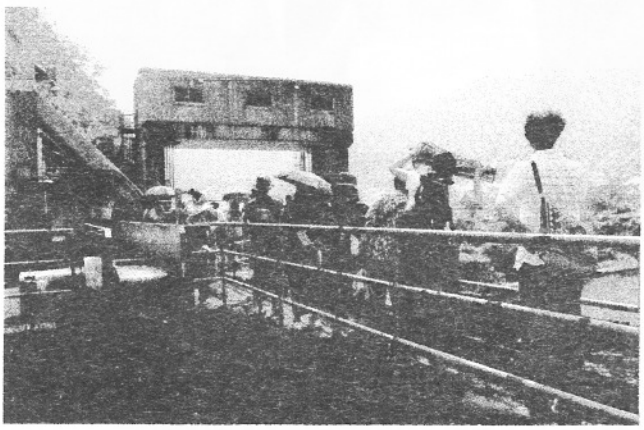
今回の分科会に各都道府県から集まって来てくれた方々が、安野の歴史事実や和解を勝ち取ったたたかいを一番身近な人から語り初め、地域や職場に伝えてくれるに違いない。そうして安野の事実が、今回の原水禁フィールドワークを通し、少しずつ広がっていく。そして、その学びは、それぞれの身近にきっとある強制連行・強制労働の事実に目を向けていってほしい。その過程の中で、先の戦争が真珠湾攻撃に端を発した欧米との「太平洋戦争」でなく、その本質は一貫して日本が朝鮮侵略をステップに中国大陸に銃剣を向けた 15 年にわたる侵略戦争であったことを示すさまざまな事実に気づいていくだろう。



津浪収容所跡で説明を聞く



香草収容所跡で日影に入って栗栖薫さんの説明を聞く



土居取水口を見学する参加者

原爆の惨禍がひたすら強調されるこの時期の広島であるが、かつて軍都として繁栄し、宇品港からは朝鮮や中国におびただしい兵士を送り出した歴史も合わせ持つ町でもある。そして人が集い、山陽線・宇品線をはじめとする交通網の整備、地元にお金も落ち、物流は活気を帯びる。産業の発達し、雇用の拡大、一途に戦争で潤って来た町広島。人もそうだ。大本営を戴く軍都市民としての誇り高い気持ち。そして南京陥落の際には各地の例にもれず祝賀の提灯行列　♪日本勝った　日本勝った　また勝った　支那のチャンコロまた負けた♪と歌いながら。そんな広島が原爆投下を境に見せる手のひら返しに、複雑な思いを抱いてしまう。広島の周辺には安野も大久野島も高暮ダムもあろうに。戦争被害者の顔が強調されればされるほど、自らの手が下した加害の事実を同時に知っていくことの必要を、半ばあまのじゃく的に主張したくもなる。いじめられること以上にいじめること、殺されること以上に殺すことがいやだと感じられる感性を持たないと、被害を受けないために軍備を持ち、「積極的」に行動できる戦争国家に変貌しようとする昨今の政治の流れに抗しきれないのではないか。

現在は6本に分かれて広島デルタを潤した川の水は、瀬戸内海に注ぎ込む。それはやがて雲となり、再び中国山地に雨となって降り注ぐ。山の谷川を伝い下りた水は、やがて合わさり、安野に戻ってくる。そんな自然の連綿とした節理のように、この山あいの地に刻まれた事実も語り継がれなくてはならない。次の世代へ、そのまた次の世代へと、これもまた川の流れのような人の世の中で。

参加者から

全ての現地見学を終わり、バスに乗り込み一路広島へ。帰りの車中では、参加者全員からの感想発表。ここではまとめるのでなく、何人かの感想を記載して、この稿を終えていきたい。

岡山Nさん：隣りの県にこのような強制連行があったことを知り、ショックだった。パネルの135カ所の強制連行の事業場の中に、地元の造船所があった。これからも学んでいきたい。

京都Oさん：帰ってみんなに知ったことを伝えたい。地元の大江山ニッケル鉱山にも強制連行の歴史がある。その勉強をしたい。

広島Yさん：過酷な労働を思うと胸が詰まる。過去のこととしてでなく、安倍政権の道を食い止めなくては。

静岡Sさん：強制連行のことは以前から気にしていた。これから地元に帰って今日のことをかみしめ、資料を読み返し、こうした事実があったことを伝えていきたい。

神奈川Sさん：分かりやすい説明だった。職場に帰って広める。

神奈川Iさん：戦争というものをしてはいけないと深く認識した。

石川Nさん：知らないことを改めて思い知らされた。谷さん栗栖さんら、話せる人がいる間に広めなくては。

東京Kさん：中国で「日本に行くな」と言われたのに、それでも架け橋になると言った曲さんの言葉に頭が下がる（DVD内容）。残留孤児の知り合いがいる。中国の人に助けられ、大学にまで行かせてもらい日本に帰ってきている。本当なら憎いはずの日本なのに育ててくれた中国人はすごい。

広島Fさん：加害の歴史を学ぶ必要がある。世界に広島を示すためにも、広島だからこそ知っておくべきことだ。

東京Kさん：和解までの長いたたかいに感動した。東京に帰っても伝えたい。

神奈川Sさん：中国人の強制連行があったことを初めて知った。地元の方の証言を直接聞けたことは、意義のある貴重な体験だった。

神奈川Mさん：来年以降もぜひ続けてほしい。トロッコの作業場も見たい。

大阪Nさん：説明の言葉に強さを感じる。「和解」とは何かを常に考えさせられる。遺族の一人ひとりの顔が思い浮かんで来た。広島を考えることを通して、「平和」を考え続けていきたい。

広島Tさん：関わってきた人達に敬意を払いたい。原水禁の分科会にこういうフィールドワークを盛り込んでくれたことをうれしく思う。若い人にもっと知ってもらい、歴史の事実を広げたい。